

特集 "聞く"



聴覚の世界

聞くこととメタファ

一 聴覚の記憶情報処理

私たちは、感覚器官を通して外界を認識している。その中で、聴覚を通して「聞くこと」は、視覚を通して「見ること」とならんで重要な感覚である。それは、(a) 事象の認知 (何であるかの同定や、状態の判断など) をしたり、(b) 言語情報 (音声) によるコミュニケーションを支えているためである。

聴覚情報は、音楽の時系列情報が中心である。時系列情報は逐次的に消失していくため、情報を記憶において一時的に保持しながら、処理することが重要になる。一方、視覚情報は、

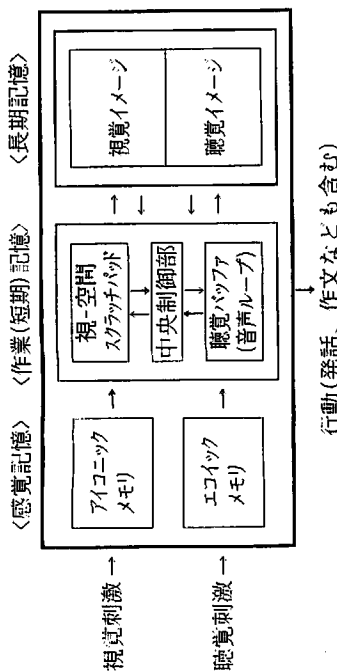


図1 聴覚情報・視覚情報の記憶情報処理

は、光点の空間配列情報が中心である。そこで、聴覚情報と視覚情報の記憶処理過程を比較してみよう(図1)。

(1) 感覚記憶：最初に、音響情報は、聴覚受容器のエコニックメモリ、視覚情報は網膜の受容器におけるアイコニックメモリにそのまま一瞬保持される。その時間は音響情報(約五秒以下)のほうが、視覚情報(一〇〇〜三〇〇ミリ秒)よりも長い。たとえば、ヒアリング問題に答える場合は、音響情報が忠実なコピーとして感覚記憶内に保持されている五秒ほどの間に判断しなければ、情報が急速に崩壊して判断できなくなってしまう。

(2) 作業(短期)記憶：感覚記憶の情報は、脳内の作業記憶に転送される。作業記憶内では、一般に言語情報は、聴覚バッファ(音声ループ)において、内的に反復されながら保持される。ここで、保持容量(意味のまとまりで約七チャンク)と保持時間(およそ三〇秒)の限界がある。また、情報は聴覚的干渉によって崩壊しやすい。たとえば、電話番号を調べてかける時は、番号を音響的に頭の中で繰り返しながら、番号をかけおわるまで作業記憶内に維持する必要がある。その最中に、そばにいる人の話しかけに答えたりすると、音声ループが妨げられて、番号の記憶は崩壊してしまう。一方、視覚的空間的信息は、視空間スクラッチパッド(メモ帳)において、短期的に保持、形成、走査される。中央制御部は、短期記憶だけでなく(言語理解や文生成などの)認知的活動をコントロールする。その結果を、(発話や作文などの)行動として出力する。

(3) 長期記憶：作業記憶の情報は、意味処理を経て、長期記憶に保存される。長期記憶には、聴覚的イメージと視覚的イメージが、保持容量と保持時間の限界なしに貯蔵されている。たとえば、「もしもし」という声だけで、相手が昔のガールフ

楠見 孝

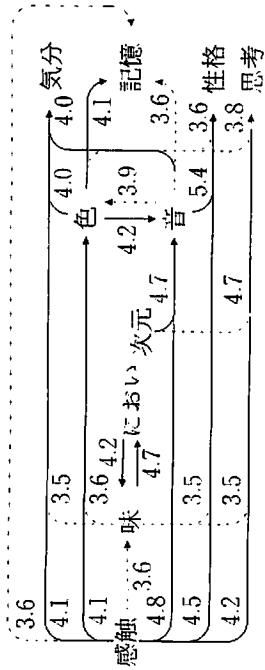


図3 共感覚メタファの理解可能性：矢印は感覚形容語→名詞の修飾方向を示す。数値は6点尺度(1.理解不能-6.理解可能)の平均評定値。4以上が実線、3.5以上を点線で示した(楠見、1990)。

験者に求めた。図3の矢印は、理解可能性の高い感覚形容語とモダリティ指示名詞の組み合わせを示す。その結果、近感覚「触覚・味覚」→遠感覚「視覚・聴覚」→心的状態「気分・記憶・性格・思考」という転用の方向が明らかになった。たとえば、感覚形容語(柔らかい、暖かいなど)は、「色」「音」さらに「思考」や「性格」などに転用できた。その理由は、感覚形容語は、圧覚、痛覚、温覚など多様な感覚形容語を持ち、対象物に接した近感覚であるため、さまざまな具体的なイメージを喚起する力をもつためと考える。したがって、聴覚のように固有の語彙が少ない、抽象的な感覚領域に転用されやすい。また、「記憶」を形容するときは、「明るい/暗い、鮮やかな/ぼんやりした」などの視覚形容語の理解可能性が高い。これは、記憶の主観的経験世界が視覚的な世界であることを示している。

こうした感覚形容語の他の感覚への転用を支えているのは、五感それぞれの感覚形容語の意味空間が「快-不快」「強-弱」の次元で共通性をもっているためである。これは、共感覚メタファ間の類似性評定や尺度評定「快-不快」「強い-弱い」に基づいて明らかになった。図2は聴覚を表現する

形容語を多次元空間内に示したものである。すなわち、「甘い音」は、味覚の「甘さ」そのものというよりも、「快」で強度が「やや弱い」という共通する次元上の意味で解釈することができる。

なお、振動周波数の多い音を、多くの言語で「高い」と表現するのは、音の高さを弁別する時、高い音は頭の中に、低い音は胸の中に感じるような主観的経験や、音源の位置などの身体経験が基盤にあるからと考える。

そのほか、聴覚を表現する形容語として、「リンリン」「バタバタ」などの擬音語(音喩:オノマトペ)が数多くある。擬音語の成立は、物音や動物の鳴き声などを、その言語の音韻体系に当てはめて、慣用化することによると考える。

四 聴覚世界のメタファ

- (6) 甘美な、生への誘惑のような音の波が、ホールの中をきらきらと光りながら走りすぎた。
- (7) 僕と千枝子との二人だけが、音楽の波の無限の繰り返しに揺られて、幸福へと導かれて行きつつあるような気がした。
(福永武彦『草の花』)

音色的印象は、(6)文のような共感覚的な形容語の利用に加えて、メタファを利用して表現する。音の記録には録音、音楽のメロディの記録には楽譜、発話の記録には文字があるが、人が感じる音色的印象は比喩的に表現せざるをえない。そこで、音色的印象の表現を、『比喩表現辞典』(中村、一九五〇)における「音」と「声」を主題とするメタファ三四四例(それぞれ一三二例、二二二例)をたどる語に基づいて分類した。表1(次頁)に示すように、最も多いたとえば、人工物音である。これらは、物音の大きさ(爆竹など)、高さ(石など)や音色的印象(糸など)の類似性に基づいている。その中でも「針、綿」など一五例は触覚に基づく共感的表現である。一方、「光」(五例)や「におい」(二例)は少ない。また、自然音を用いたたとえも多い。(7)文のように「波のような」音の反復や持続を示す表現が多い。また、主題「声」の感情的側面は、動物音や人間音でたどることが多い。また、楽器音のうち「鈴、笛、太鼓」など良く知っている音は、音や声を表現する慣用的なメタファとして用いられる。

つぎに、「きく」という感覚動詞自体の比喩的用法を検討する。「きくこと」は、音を耳で感じる「聞く」が基本的用法で

表1 音、声に関するメタファのたとえる語の頻度

カテゴリ	頻度	たとえる語 (頻度) の例
人工物	74	糸(5)、石(3)、花火(2)、鞭(2)、氷(2)、紙(2)、針(2)、やすり、花火、爆竹、…
自然	68	風(7)、波(5)、水(5)、潮(5)、雷(3)、怒濤(3)、泡(3)、津波(2)、滴、光、…
動物	43	鳥(7)、獣(4)、カラス(4)、虫(3)、蛙(2)、蚊、ガチョウ、セミ、蜂、牛、…
人間	26	子守歌(2)、咳(2)、歯ざしり、声、歌声、すすり泣き、あくび、吐息、足音、…
楽器	26	鈴(4)、音楽(3)、笛(3)、鐘(2)、太鼓、ドラム、法螺貝、琴、コントラバス、…

(注)カッコ内は頻度1を示す

ある。さらに、意志的な行為である「音楽を聴く」、相手の発言を共感的に理解し、その言葉を受け入れ、行動する「願いをきく」がある。逆に、積極的な問い尋ねる行動である「住

所を訊く」「専門家に訊く」がある。「きく」は、聴覚に基づき認知的活動全般に派生している。さらに「ワイン/香りをきく」(弁別する)は、非視覚的な統合的分析的判断への比喩的な派生と考えられる。

一方、「みること」は、対象に目にとめて知る「見る」ことを基本的用法とする。さらに、意志的に調べる行為である「答案をみる」「味をみる」、楽しみのため見てまわる「展覧会を観る」、様子を見て世話をする「赤ん坊を看る」、判断をおこなう「病気を診る」などがある。「みる」の用法は、視覚を中心として、他の感覚も統合した判断、決定といった高次の認知と対処行動に派生している。さらに、高次の認知の結果として「景気は上昇局面とみる」といった予想や判断、仮定の表現もある。

五 まとめ:聞くこととメタファ

聴覚情報を言語表現することは、時間経過によって消失してしまう音に、具体的な形を与え、語ること、記録することを可能にすることである。本稿では、こうした聴覚情報の特徴を、視覚情報と対比して、記憶情報処理のプロセスに基づ

いてまず明らかにした。さらに、音色の印象を表現するための、触覚を主とする共感覚メタファや、人工物や自然物メタファについて検討した。

【参考文献】

梶見孝(二六〇)「共感覚的メタファの心理—語彙論的分析」『記号学研究』八、三三—三九
 梶見孝(二六〇)「比喩理解の構造」芳賀純・子安増生(編)『メタファ—の心理学—誠信書房
 梶見孝(二六五)「比喩の処理過程と意味構造」風間書房

中村明(二六五)『比喩表現辞典』角川書店
 難波精一郎(二六五)「音色の定義をめぐって」『日本音響学会誌』四九、三三—三九
 寺西立年(二六〇)「音の聞こえと認識」『日本音響学会誌』四四、三三—三九
 Ullmann, S. (1959) *The principles of semantics*. 2nd ed. Blackwell.
 (邦訳「意味論」山口秀夫(訳)紀伊国屋書店(二六〇))
 Williams, J. M. (1976) Synaesthetic adjectives: A possible law of semantic change. *Language*, 52, 461-478.

(くすみたかし/認知心理学)

『言語』別冊 好評発売中!
 (定価 1,400円)

変容する日本の方言

—全国14地点、2800名の言語意識調査—

方言は確実に変容している。その要因としてこれまで注目されてきたのは、マスメディアを通して流れてくる共通語の影響であった。しかし、現実には地域差がみられ、それぞれの方言が同じ方向を向いて一律に共通語化しているわけではなさそうである。方言の変容には、方言の話し手である人々が、どのようになら自分の方言を見ているのか、共通語をどのようなスタンスで捉えているのかといった「言語意識」が大きく関与していると思われる。

今回の企画では、各地の方言を変容させている人々の言語意識を探り、合わせて、地域的偏差を浮き彫りにすることを目的とした。

- 札幌▶札幌のことばは共通語と同じか(渡邊修平)
- 弘前▶方言主流社会(佐藤和之)
- 仙台▶住民意識に見る方言志向・共通語志向(小林 隆)
- 東京▶首都方言の感化と言語意識・言語変化(吉岡泰夫)
- 千葉▶東京近隣の共通語主流社会における言語意識(藤崎 一)
- 金沢▶隠れた方言コンプレックス(加藤和夫)
- 松本▶気づかれにくい方言の隆盛と俚言使用の二相化(沖裕子)
- 大垣▶東西境界地帯の方言意識(久野 真)
- 京橋▶心情とわきま意識の衝突するところ(渋谷勝己)
- 広島▶関西弁は方言を変容させるか(友佐賢治)
- 高知▶方言と共通語の間で(上野智子)
- 福岡▶地元意識と開放性の共存する都市方言
 (樋内正敏・坪内佐智世)
- 鹿児島▶方言から「からいも普通語」へ(木部暢子)
- 那覇▶中間方言としてのウチナーヤマトクネの位相(大野真男)